

令和3年度「学生ボランティア活動体験レポート」優秀レポート一覧

【優秀レポート】10件

(応募順)

番号	大学名	氏名	タイトル	活動分野	所属ボランティア団体名
1	中央大学	山口 葉奈	活動しながら考え続けたボランティアの役割	被災地支援	中央大学ボランティアセンター公認学生団体 面瀬学習支援
2	青山学院大学	岩田 真悟	私たちと越喜来の未来のために	被災地支援	学生団体 Youth for Ofunato
3	熊本学園大学	菊本 大新	学生ボランティアを通して感じたこと・これからの活動について	被災地支援	おひさまカフェ
4	滋賀県立大学	里本 麗	被災地支援と私たちにできること*	被災地支援	たけともミライ
5	大阪大学	河内 康宏	コロナ禍の語劇団、私たちに何ができるのか*	地域連携(交流)	大阪大学中国語劇団
6	淑徳大学	野村 真緒	コロナ禍におけるリモート手話指導ボランティアへの初挑戦*	福祉	手話サークル たんぽぽ
7	福岡女学院看護大学	三輪 真菜実	自分にできることを最大限に	福祉	福岡女学院看護大学ボランティアサークル 葡萄
8	明星大学	中村 有伺	元気と笑顔を届ける音楽ボランティア	地域連携(交流)	明星大学音楽ボランティアサークル Freedom music
9	聖学院大学	金久保 仁	私とボランティア	地域連携(交流)	聖学院大学ボランティア・アソシエーション・GRACE
10	西南学院大学	篠原 健吾	コロナ禍の今、変わるボランティア	福祉	ワークキャンプ部

\*を付したものは特に優れたレポート(以下に掲載)

## 「学生ボランティア活動体験レポート」

大学名	滋賀県立大学
団体名	たけともミライ
作成者（所属学部学科・氏名）	環境科学部環境建築デザイン学科・里本麗

タイトル：被災地支援と私たちにできること

私たちが活動を行っている宮城県気仙沼市は、2011年の東日本大震災による大津波で大きな被害を受けました。津波は、人々にとって大切な集会所や、子どもの遊ぶ場所を全て奪っていきました。

—「地域の将来を語りたくても、集まる場所すらない」

地域の方々が嘆く声を聞いて、被災地に人々の集まれる場所を築こうと始まったのが、私たちたけともミライの前身である「竹の会所プロジェクト」の始まりです。竹の会所プロジェクトでは、学生・社会人延べ70人での完全手作業工事を経て、地域の人々が集まる手作りの集会所「竹の会所」が建設されました。その後、「ひとりひとり小さな力でも、みんなの力を合わせれば大きな力になる。」その思いを実感した学生たちが、竹の会所の維持管理をしながら、被災地を支えていくために“たけとも(竹の会所・友の会)”を発足させ、その後も毎年現地を訪れ活動を続けてきました。竹の会所は地域の伝統芸能である平磯虎舞の練習場所として子どもからご年配の方まで多くの世代の方に大切に使われてきました。たけとも活動は地域の子供たちと学生が共に学ぶ“たけとも祭り”を中心として行われてきましたが、地域の復興が進んできたため2017年に「たけともミライ」に改名し東北のミライを考える活動になりました。そこでは、たけとも祭りに加え、地域の人々の暮らしやまちの様子にも目を向けるためまち歩きなども行うようになりました。世代が入れ替わり、当時を知らない学生が増えていくなかで、変わらず活動を行ってきたのはこうした学生から学生へ震災を伝えていくことを大切にしてきたからだと思います。

私は現在、この団体の代表をしています。初めて活動に参加したのは2018年度。被災地に行くこともボランティアに自主的に参加することもこれが初めてでした。まち歩きや現地での生活を通して、7年という期間がたってもまだ工事が続く地域を見たり、震災が起きた時のまま残された建物を見ることで被害の大きさが計り知れないものだったと実感し、当時の人々に思いを馳せ、胸を痛めるまでの感情を抱くことができました。このとき、写真を見るだけ、人から話を聞くだけでは実感できない出来事も、自分が現地に出向き触れることで立派な経験になりうるのだと強く感じました。

そして2019年、7年半の仮設建築期間を終えた竹の会所の解体を行いました。解体前には建設当時参加したOBなど、たけともに関わった方々を招いて「閉所式」を行いました。この時、地元の方と話をすることがありました。私よりもずっと前から竹の会所を見守り、利用してきた地域の方から「この竹の会所をずっと虎舞の練習所として使ってきた。」という生の声を聞いたとき、竹の会所が実際に使われてきたという物語が、私の中で事実として確立されました。竹の会所が完全に解体され、たけともミライの活動が終わりに向かうなかで、私たちに今できることは何かを考えました。

その結論の一つとして、「伝える」ことが大切であると考えました。今の団体に当時を知る学生はいませんが、それでも私たちは8年間の活動を記録する1冊の本を制作することに決めました。本をつくるなかで「竹の会所」に関わってきた多くの方と連絡を取り、話を聞きました。地域の方、先生、建設した学生、維持してきた学生、私たち、それぞれが感じたこと、どんな思いだったのか。出来事を「残す」ために始めた本の制作でしたが、制作をしながらも当時の出来事や思いはひしひしと私に「伝わって」きました。また、当時の学生が何を思ったのかを地域の方に伝える機会はそう多くはなかったし、地域の方が当時どう思っていたのか当時の学生たちは知らないまま活動をしていました。この本を読んで当時を知らない人たちに当時のことが伝わるだけでなく、当時の人たちが互いに当時の思いを知ることになるのだということにも気づきました。こうしてそれぞれの思いを、当時を知らない私たちが聞き出し、本に残していくという作業はまさに「伝える」ということでした。そして多くの方から話を聞くほど、2011年から現在に至るまでの10年間、たけともがどれだけ多くの地域の方々を支えられて活動を続けていくことができたかということに改めて感じました。

ボランティアの活動はボランティアする側とされる側があり、する側が一方的に支えるというイメージが一般にあると思います。しかし、本当はそうではないということが活動を通して感じられました。たけともの活動のような被災地支援の場合、被害を受けたばかりの被災地は決して簡単に踏み入れられる場所ではないことがほとんどです。場所もモノも人も傷ついた場所に踏み入るとするのは、必ず受け入れてくれる現地の人がいればこそ成り立つことだと感じました。ボランティアをするひとは必ずそこに対する感謝を忘れてはいけません。また、ボランティアとして活動することだけを目的とするのではなく、活動を通して得たことを「伝える」ことが大切だと強く感じました。たけともの活動に参加し、私は見るだけでなく携わることで得るものの多さを知りました。実物を見ること、関わった人と話すこと、自分が経験しないとわからないことがたくさんありました。出来事を直接経験していなくても、ボランティアを通して何が起きたのかを確かめることはできます。本の制作を通して、起きた出来事、どんな活動をしたか、どんな思いだったかなど伝えるべきことはたくさんあると感じました。ほとんどのボランティアが支援の終わりを活動の終わりとしていると思います。しかしボランティアが必要なほど困難な状況があったことと、そのときどんな活動をしたのかを伝えることで出来事を風化させないだけでなく、今後同じようなことが起きたとき誰かのために役立つことができます。

どんな出来事も時が過ぎれば薄れていってしまうことは仕方のないことですが、私たちには伝えることができます。今回このレポートを通して伝えることで、震災及び私たちの活動が誰かの新たな経験につながることを願います。

「学生ボランティア活動体験レポート」

大学名	大阪大学
団体名	大阪大学中国語劇団
作成者（所属学部学科・氏名）	外国語学部外国語学科中国語専攻所属・河内康宏

タイトル：コロナ禍の語劇団、私たちに何ができるのか

私たち中国語劇団は現在の大阪大学外国語学部の前身である、旧大阪外国語大学から 60 年近く続く歴史ある劇団です。近年は年に 2 回、7 月と 11 月に定期公演を開催しており、毎回 100 人を超えるお客様に会場いただいています。(写真 1) 構成員は主に大阪大学外国語学部中国語専攻の 1 年生から 4 年生ですが、発音や演技指導のため中国人留学生も数多く在籍しています。そのため、この劇団は日中交流のプラットフォームのような機能も有しており、言語交換や文化交流が盛んに行われています。また観客層は主に、教職員や OBOG の皆様、中国人留学生そして地域の方々で構成されており、大学内のみならず地域の皆様に中華圏と触れ合う機会を提供しています。さらに海外公演も数多く行っており、2014 年の武漢での公演を皮切りに、北京や台湾で公演の成功を収めました。そしてこの活動は新型コロナウイルスが流行以降も途絶えることなく続けていこうと考えています。実際、2020 年 2 月の台湾公演では団員全員が参加することができなかつたため、秋公演の作品を行うことができませんでした。そこで、少人数でもできる日本のショートコントを中国語で披露することを試みました。このショートコントで笑いを共有することによって場が和み、公演後の交流会もスムーズに進行させることができました。(写真 2) また、劇だけではなく、当時流行していた J-POP に合わせてみんなで踊るコーナーも設け、台湾と日本両者の学生が楽しめるよう工夫しました。それまで演劇という形でしか中国や台湾の人々と関わりがありませんでしたが、この公演から演劇以外での交流も積極的に行うようになりました。このような日々の国際交流や地域交流の活動が大学からも評価され、過去には大学内で顕著な活動をしている団体に贈られる大阪大学外国語学長賞を受賞したこともあります。その結果、「日本が好き」、「日本語を勉強したい」、「日本人の友達が好き」というネイティブが徐々に集まり、私たちは徐々に活動の幅を広げてきました。

ところが 2020 年、新型コロナウイルスの蔓延により定期公演の一つである夏公演が中止となりました。そのため、次の秋公演が新型コロナウイルスの流行後初めての公演となりました。(写真 3) 緊急事態宣言は解除されていたものの、対面での練習を可能な限り削減することを余儀なくされました。しかしながら私たち“語劇団”は、声の出し方や問の取り方、体の動かし方など現地練習が必須である項目が多いため、オンラインよりも対面練習の方が重要であることは明らかでした。さらに感染状況が日々変化するため、本番自体も対面なのかオンラインなのか、有観客か無観客かなど、どのような形式で公演を行えるか予測がつかない状況でした。しかし、私たち中国語劇団の存在意義は、私たちの劇を楽しみにしてくださっている留学生や地域の皆様にこれからも絶え間なく劇をお届けし、日本と中国を結ぶプラットフォームを提供することです。このことを改めて劇団全体で共有する

ことで今回の困難に立ち向かうことを決めました。具体的には、中国語の発音や意味の確認などオンライン上で行えることと、先述したような対面でしか行えないことを分別することから始めました。また、どの公演方法でも早急に対処できるよう、さまざまなパターンを予測した練習をしました。このように、従来のやり方のうちオンラインに代替できる作業をこの機会に刷新することで、コロナ禍でもより柔軟に対応できる新たな体制を構築しました。結果として、公演自体は当時の感染症の状況を鑑みた大学の指示により配信公演となってしまいましたが、この公演を通して団員が語劇団の存在意義を再確認でき、コロナ禍における運営の基本方針を作ることができたことは非常に大きい収穫でした。

それから半年後の夏公演では、メンバーが大きく変わりました。就職活動や留学で上級生が一時的に抜け、初参加の一年生から三年生で活動をするため、組織の存続において重要な期間です。しかし、演目が決まり練習を開始してから感染状況が悪化し、出演イベントの中止により私たちの公演も中止を余儀なくされました。公演成功という経験をしていないままでは、一年生に中国語劇団の良さを伝えられないという不安が生じ、上級生間で公演をせずとも活動を続けるべきだという意見と、公演ができないなら活動を休止しようという意見の対立がありました。しかし最終的にはほとんどの団員が劇を続けられなくても活動を続けたいという想いを示したため、一年生のためにも、そして語劇団の伝統を受け継いでいくためにも何かしらの形で活動を続けることにしました。一年生は対面授業も満足に受けられず、上級生や留学生はもちろんのこと、同学年との繋がりがあまりありませんでした。また、中国語に対する意欲や不満をぶつける場所もありませんでした。中国語専攻の先輩として、このような状況下の一年生にも中国語を話せる場所、中国語圏の社会文化を知ることができる場を作ってあげたいという思いもありました。そこで、公演以外の主な活動内容としてオンラインでの交流会を複数回開催しました。(写真4) 他大学の学生との交流も設けようと、名古屋大学、上海交通大学との三大学合同の交流会や、海外公演を経験した上回生からのエピソード紹介、活動休止中の上級生を交えた交流会などを行いました。活動を重ねるにつれ、公演ができないながらも日中のプラットフォームを提供できていることを実感したと同時に、それでもなおまた公演をしたいという思いが高まりました。

そして、約2年に渡って対面公演を行えていないことに対しての不安を取り除くべく、今年の10月2日から二日間にわたって開催された「箕面国際フェスティバル」というイベントにも参加しました。(写真5) これは大阪大学が運営をするイベントではありますが、キャンパス周辺の数多くの企業や団体も参加し、地域一体となって盛り上げる催し物です。この場での対面公演には中国人も観にきてくださり、地域の人々にも中国語を身近に感じもらうことができました。そして現在、秋公演に向けての準備および練習に取り組んでいます。感染症の状況は依然として不透明であり、本番はどうなるのかという不安はもちろんあります。無観客になるのか、はたまた中止になるのか。それでも私たちの劇を楽しみにしてくださっている皆さんのためにも公演が行えると信じて、日々活動に取り組んでいます。SNSの活用やラジオ番組への出演など、広報活動にも注力することで多くの留学生と地域の方々の来場を図っています。困難な状況で最初は公演中止、団員の士気低下と様々な壁がありましたが、今ではどのような状況でも私たち語劇団にできることがあると確信しました。公演と同時に更なる国際交流・地域発展に貢献できるよう中国語劇団は皆さんに交流プラットフォームを創造し、提供し続けていきます。





(写真1)



(写真2)



(写真3)



(写真4)



(写真5)

「学生ボランティア活動体験レポート」

大学名	淑徳大学
団体名	手話サークル たんぽぽ
作成者（所属学部学科・氏名）	総合福祉学部 教育福祉学科 ・ 野村 真緒

タイトル：コロナ禍におけるリモート手話指導ボランティアへの初挑戦

新型コロナウイルスによるサークル活動の中止や制限が始まったのは、今から1年半ほど前の2020年の3月頃であったと記憶している。今まで通りのサークル活動が行えなくなった、コロナ禍の今だからこそできる活動が手話サークルたんぽぽのもとに舞い込んだ。それが、「Zoomを使用したリモートで、子どもたちに手話を教えるボランティア活動」である。

「手話サークルたんぽぽ」は、耳の聞こえる「聴者」と、耳の聞こえない「ろう者」が一緒に活動をしている。レクリエーションを交えながら手話を勉強したり、コロナ禍になる前には、年に2回、合宿を開催したり、イベントにて手話ソングを披露したりする活動を行っていた。

サークル活動が徐々にできるようになってきた2020年の9月下旬頃、大学のボランティアセンターのもとに「小学生の娘に手話を教えてほしい」とのご依頼が届いたと話を聞き、とても驚いた。手話に興味があったとして、それを親に伝え、そして親がそれを叶えようと大学にメールをする。後に分かったことだが、お母さんは淑徳大学の卒業生であり、手話サークルの存在を知っていた。しかし、もし私が親と子、どちらの立場だったとしてもそのような行動はできないと思った。小学生の時の私は、そもそも手話に興味もなく、手話を教えてほしいということを思ったことはなかった。親だったとして、大学にお願いするなんてことをして良いのだろうか、と気後れしてしまったり、子どものいうことでしょ、と流してしまったりすると思う。

子どもたちはその娘さんも含め小学生が3人、大学生スタッフは6人で手話の勉強会を進めていくことに決まった。お母さん、子どもたち、大学生スタッフ、誰にとっても初の試みであるリモートで手話の勉強会をするということ。楽しみであるわくわくした気持ちの反面、リモートで手話を教えることができるのか、小学生の子どもたちとコミュニケーションをとることができるのか、なおかつ楽しんでもらえるのだろうか、という不安も大きくあった。

いよいよ当日。始まってみるとそんな不安は吹っ切れた。小学生の子どもたちは緊張しながらも、笑顔で楽しんでいるように見えたからだ。誰にとっても、よく知らない人とかかわるということはとても不安で怖いことであると思う。その不安や緊張を少しでも軽くするために、勉強会の初めに簡単なクイズや、お互いを紹介しあうなどのアイスブレイクを取り入れた。アイスブレイクを取り入れることにより、楽しく、そしてより自然に手話を覚えることにつながり、子どもたちとの仲も深められたと感じる。

しかし、リモートで手話を教えることの難しさ、というのも経験することになった。「左右の手の動き」についてだ。私は普段から当たり前のように手話を使っているため、テレビ電話をするときにも左右を意識することはなかった。しかし、お母さんから「左右がわからなくなってしまったので、腕に

目印をつけてほしい」と話を聞いたときには、ハッとさせられた。リモートの画面上では、画面によって左右が反転することがあるため、右手なのか、左手なのか、左右どちらに動かすのか、手の形、動きがわかりにくくなってしまいうことに改めて気づいた。そして、参加している子どもたちが困っていることに気づくことができなかつたことにとても申し訳ない気持ちになった。次の勉強会からは、右手にゴムや腕時計をつけることによって左右をわかるようにし、教えるときにも右手は、左手は、と意識して教えるように心掛けた。また、リモートは教室の環境とは違い、小さな声で助けを求めることができない。助けを呼ぼうとすると、全員に注目されてしまう。そのため、子どもたちのしぐさや表情をよく見るようにした。そうすることによって、「もしかしたら困っているかもしれない」と気づいたときに、スタッフである私たちから先に声をかけることができるからだ。

それから、隔週で手話勉強会を開催していき、子どもたちと私たちスタッフがお互いのことをよく知ることができた頃、聴覚障がいに関するトーク企画を行った。手話勉強会には、耳の聞こえる「聴者」のスタッフのほかに、耳の聞こえない「ろう者」のスタッフも参加している。子どもたちからは多くの質問があった。最も印象に残っているのは、「障がいのあることに対しての心情」の話である。「障がいがあると気づいたとき、どのような気持ちだったか。もし自分だったらつらく悲しい気持ちになってしまうと思う」という質問があった。私はドキッとした。なぜなら、この質問は知りたいと思って聞きたくても、踏み込めずに聞けなかつたことだったからである。この質問に対するろう者の答えは、「聞こえない世界は、自分にとっては当たり前と考えているのであまり悲しい気持ちにはならない」とのことだった。しかし、「聴者と交流する機会があつたときに、会話の内容が分からないことがすごく悔しかった」と回答してくれた。この回の勉強会で私は、子どもたちの言つたことを手話通訳してろう者に伝え、ろう者の言つたことを音声通訳して子どもたちに伝える役割をしていた。しかし途中、通訳を忘れてしまうくらい、ろう者の話に聞き入つた。それくらい、深い内容の勉強会だった。

そして現在は、全国手話検定試験に向けての勉強会を開催している。手話勉強会を始めて1年もたたないうちに、子どもたちがここまで上達しているのにはスタッフである私のほうが驚かされる。将来、特別支援学校の教師を目指している私にとって、この勉強会を通して「考える力」や「教え方の工夫」というものを身につけることができたと思う。例えば、子どもたちがわかつていなかつたときに何がいけなかつたのか、うまくいったときには何が良かったのか、どのような順番で行えば理解しやすくなるか、どのように行うことが最年少の参加者にも楽しんでもらえる勉強会になるのかということなど、今まで大学の講義で授業の作り方を学んでいたが、これほどまでに実践的で深く学びになるものはないのではないかと思つた。手話勉強会を始めたころは、手話を学びたいという子どもたちの力になれたら良いな、と考えていたが、今となっては、私が学ばせてもらつているように思う。何よりも、手話勉強会のスタッフをしたことにより、改めて気づかされたことがある。それは、私は手話が好きであること、子どもとかかわることが好きであること、教えることが好きであること、である。そして、子どもたちの力はととてもすごいものであり、自分の予想をはるかに超えてくるのだな、ということである。

このボランティア活動は、コロナ禍だからこそできた活動であると感じている。しかし、やはり子どもたちと実際に会つて手話で話したいと思う。いつかコロナが落ち着いたら、お互いにもっと成長した姿で、直接会つて手話で話したいと思う。